

第 18 回語学留学生による日本語弁論大会

去る 10 月 23 日、埼玉県の埼玉会館において、関東甲信越地区日本語教育機関連絡協議会主催の「第 18 回語学留学生による日本語弁論大会」が開催された。

今年は、17 名の参加者の予定であったが、台風の翌日であり交通機関の関係で残念ながら一名参加ができなかった。今までは中国人や韓国人の留学生が多いと感じていたが、回を重ねるごとに、様々な国からの参加者が増えてきた印象である。今年はスリランカの留学生の参加者が多く、そのほかにもネパールやカザフスタン・インドネシア・モンゴルなどの留学生が民族衣装などを着て、半分緊張、そして半分自分の言いたいことを言えるという自信をのぞかせた表情で話をしていった。

もちろん、日本語学校の中で、内容・表現力・日本語力だけでなく、その感覚、例えば日本に来て覚える新鮮な感覚、日本への観察眼なども競ってきているのである。その内容は、日本のすばらしさや、日本人の我々が知らない一面を伝えてくれるもの、または日本と母国の違いや、母国にいる自分の家族の大事さ、そして将来の夢など、様々な内容になるが、そのメインテーマを、どのようにエピソードや例を挙げながらわかりやすく伝えるかということに、それぞれ工夫を凝らしている。そしてトークだけではなく、ジェスチャーや顔の表情までできるものをすべて使って表現するさまは、私たちが外国に行った時も、同じようにするであろうと簡単に想像できる。人間は耳や眼だけではなく、その雰囲気などで物事を受け取り、そして自分の内心を言葉だけでなく、身体全体を使って表現することができるということを、改めて弁論大会で感じたのである。

毎年行われているこの弁論大会も今回で第 18 回、何よりも「継続は力なり」という言葉を思い出す。もちろん 18 回という回数で「少ない」とか「まだまだ」というような思いもあるが、逆に「18 年も続いている」というところもある。そこには主催者や関係者による並々ならない努力があったからではないだろうか。当然に、我々が知り得ない様々な困難や苦勞があったことと思う。

ではなぜ、そのような努力や苦勞をするのであろうか。もちろん、弁論大会のためであるが、それを継続することに何があるのか、ということを考えてみたい。

一つには「留学生のため」であることは間違いない。外国から来て日本語を勉強する、その勉強の方法は学校ごと、または人それぞれに様々あると思う。その中で、「勉強の目標」となることがあってもよいのではないか。もちろん留学生の目標は、日本語を学んで日本の

企業に勤めたり、あるいは母国に帰って日本との懸け橋となったりというような目標があるが、しかし、それは少々先の話になってしまう。そのために「短期的な目標」、つまり日本語学校で留学している間に目指すことのできる目標というのがあってもよいのではないかと思う。もちろん、賞をもらうということも一つの目標かもしれないが、自分の考えを聞いてもらう、自由に日本語を使って自分の意思を伝えることができる場というのは、実は留学生にとっては少ないのではないか。学校とか、アルバイト先とか、近所の買い物時など、特定の人に特定の会話で済んでしまう、これではなかなか日本語も上達しないし、また向学心も湧いてこない場合もある。そのために広く、たくさんの人に自分の考えを伝える機会を作ることが、勉強を頑張る短期的な目標になるということに間違いがない。

しかし、では留学生のためだけであろうか。実際に、客席には多くの日本人が学生たちの言葉に耳を傾けて、頷きながら聞いている姿があった。もちろん、平日の昼間であるから、会場に来て聞くことのできる人は限られているものの、その表情は、留学生の言葉一つ一つに感動し、日本で生まれ育った日本人には気がつかないことなどがたくさん含まれているため、驚きに満ちているのである。そう、この弁論大会を行うもう一つの理由は、「日本人が日本に気づくため」であり、また「留学生が何を考え、どのようなことに興味を持っているのか、また何を不思議に思っているのか」という日本人同士では気づかないことを知る」ためにあるのではないか、と思うのである。

そのように思って聞いてみると、なかなか興味深いことを言っている留学生が少なくない。今回の中では、あえて演者の名前などは伏せるが、駅前で友達と待ち合わせをしていて、男性からナンパされて困っているのに、通行している日本人は見て見ぬ振りをしていて困ったという話。日本人は優しいとか、日本人はよく気が利くなどということをもスコミで言われることもあるが、一方で確かに「事なかれ主義」とか「触らぬ神に祟りなし」といった感覚があり、明らかに他人が困っているということがわかっているのに、見て見ぬ振りをして通り過ぎてしまう人が少なくないのである。同じ日本人であっても残念であると思うが、ではいざ自分がその場を通りかかったとして助けることができるであろうかと考えると、確かに助けるというような自信はない。日本人ならば、そんなもんかと思ってしまうことが、彼にはかなりショックであったようだ。その辺の感覚が、その留学生の母国と日本の感覚や文化の違いということになるのではないだろうか。

もう一人紹介すると、漢字が嫌いという留学生がいた。でも、「神様に祈る、努力をする、運命を信じる」という三つのお母さんからの教えを胸に頑張って、何とか漢字嫌いを克服して、日本語に慣れ親しもうとしているという話であった。漢字は、ワープロや携帯電話の発達によって、今では自分の手で書くことはほとんどなくなってしまい、「活字離れ」が、日本の若者の間で読むことから書くことから顕著になってきている。留学生が、彼らと同世代の人と話しやすいのは当たり前であり、そのような状況で、同世代の日本人があまり漢字使わなければ、漢字に親しみがより一層持てないということも理解できないことではない。しかし、日本人におけるこの活字離れと、漢字を使っていない国の人々が漢字に関して難し

いと感じていることは、我々でもその理由について想像がつく。どちらかといえば、漢字の教え方を工夫しなければならないということになってしまっているのではないか。

しかし、その漢字の話以上に興味深かったのが、三つの支えである。「神様に祈る」「努力をする」「運命を信じる」というこの三つ。特に神様に祈るということが第一にきていることに、日本人はかなり違和感を持ったり、文化の違いを感じたりするのではないか。日本人の場合は「努力は嘘をつかない」などと言うが、「神様」とか「運命」ということを重要視する人はかなり少ないし、また、そのことを公に話す人も少ない。日本では、文化的に「宗教・政治・軍事」について話すことは、人間関係を壊す会話としてタブー視されることが少なくないが、外国に行けば、この三つのことで自分の意見を言えなければ、逆に一人前とは思われない。特に宗教というのは、海外においては「道徳心」とセットになって考えられており、その人の行動規範の一つとして数えられるものになっている。そのために、どのような行動をとるかにしても、また価値観の基準をつけるにしても、いずれも「神様に祈る」ということを中心の物事を進めることも少なくない。その意味において、日本と海外との感覚の差が大きいことは否めない事実であり、日本人の価値観と全く異なるところではないかという気がするのである。

しかし、もちろん「違う」から「否定する」のではなく、「受け入れる」ということが、日本人には大事なのではないか。日本人は、「出る杭は打たれる」など、人と異なることをする人を排除したり忌み嫌ったりする。また遠ざけたり、違和感をもって接してしまったりすることもある。しかし、実は「違うもの」こそ貴重であったり、あるいは自分たちに新風を巻き起こしてくれるものであったり、また「違うもの」とわかり合うことで新たな調和が始まるのである。その根本のところの「価値観」を共有することを、この留学生たちは皆理解しているにもかかわらず、日本人にはできてないというようなところを、この話の中では気づかせてくれたのではないか。

そして同時に、我々が外国に行った時、また外国で仕事をしようと思った時には、この留学生たちの言葉の一つ一つが、自分のこととなって降りかかってくるのである。このことを教えてくれるということが最も重要なのではないか。また、そのようにして彼らの話に耳を傾け、彼らの言葉一つ一つの意味を考えることこそ、「知日派」から「親日派」を作り出す日本人の力となることに間違いがないのではないか。

このような意義が、この弁論大会では公に認められている。そのために法務大臣賞、外務大臣賞、文部科学大臣賞、埼玉県知事賞、さいたま市長賞など、関係省庁の大臣や地方自治体のトップなど十を超える団体からの表彰があり、また様々な団体からの後援がある。まさに 18 回という数を重ねることによって得られた信用と、そして留学生たちの言葉一つ一つの意義、そして日本の再発見ということ、また日本を再評価することの重要性が認められているということなのではないか。